

番組：「毎日大変だけど楽しい」を見て

7才の時に入所し、42年間の療護施設生活にピリオードを打ち、アパートを借りてヘルパーの支援を受けながらも、一人で自立生活を始めてまだ5ヶ月の重度のCPの女性の「毎日大変だけど楽しい」を視聴した。

42年間の施設生活から一人での自立生活の大きな変換には、恐らく想像を絶する不安があったらうし、それを振り切る凄い勇気だと思う。

彼女は、決められたスケジュールで、しかも介助がないとベッドから離れられずにTVを見て過ごす何もしない自分をもったいなく思い、また、時間だけが過ぎて行く空しさから、「人生を自分に取り戻したい」の一途な願いから退所を決意したよう。

今は、辛うじてコントロール出来る頭部（顎）で電動車いすを動かし、ヘルパーと共に外出を楽しんでいる。

また、キャベツ一枚をヘルパーに押させてもらい、口に加えたナイフで切るなど、自分で出来ることにはチャレンジする生活を楽しんでいるよう。

施設と異なり、献立一つをとっても自分で決めなくてはならないが、自分で出来そうなことは自分で行い、他の出来ないことはヘルパーに支援を受ける生活の中で、「自分の存在がある」と日々感じているという。

正に、「毎日大変だけど楽しい」ということだろう。

一方、障害者自立支援法が施行されて3ヶ月が過ぎ、1割負担が大きく当事者にのしかかり、作業所等からの退所者は3～6%に上がり、未熟な法故の予想された具体的問題点が次第に明らかになってきている。

この女性も4月からの障害者自立支援法施行は知っていたはず。

負担を覚悟で、あえてこの時期に自立生活を選択した彼女を知ると、作業所等から退所した方々は、折角の「自分の存在がある」場をなくし、どういう気持ちで日々家で過ごしているのだろうかと思ってしまう。

もちろん、作業所等で得る工賃と負担額がほぼ同額になるケースもあるようなので、そうした施策の再検討は当然必要であろうし、現にこうした事態に、負担額軽減策を独自に打ち出した自治体も出てきている。

そうした施策の充実のためにも、障害者自身が折角の「自分の存在がある」状態を諦めないで、そこから法の未熟さを発信して欲しいと願う。

(2006年7月5日 記)